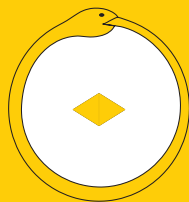
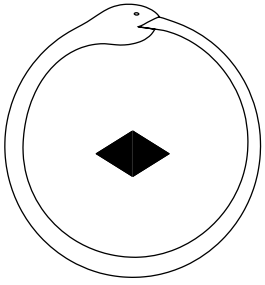




セルヴァジェム
生命は野生的である
アイウトン・クレナツキ



セルヴァジェム
SELVAGEM
手帖



生命は野生的である アイウトン・クレナッキ

帆船

野生の核心の間近で。太陽の間近に留まり、その内部が熱く驚くべきものであると見届けるかのように。野生の核心の間近で、ちょうど太陽の間近にいるのと同様に。それは同じ原子の内側にいることなのだ。

文明化されたものと野生的なものを区別する道德判断とは異なり、私はこれまで野生的なものを生命として見てきた。生命の現れは野性的だ。エマヌエレ・コッチャの理解では、生命は変身であり、人間種に特有の平均値〔文明化されていること〕から逸脱している。生命は私たち〔人間〕という種を求めている。生命は、私たちという種を貫いている。それゆえ、木はかつて石、川はかつて雲だったのだ。それはなんと驚くべきものであることか。雲が見える時、川が見えているのだ。そのように見える時、あなたは進化というものを体感している。進化といっても、私たちの外側で生じる進化のような、20世紀に想像された窮屈な意味ではない。この意味での進化は、文化と自然という二つの枝に囚われている。この対立から逃れるべく、コッチャは、一つの世界観を提案する。それは、生命の成り立ちを扱う創作論〔poética〕であり、そこで彼は、人間のDNAは人間以前に存在した全ての〔生命の〕混合物だ、とまで言う。それは、人間を神話的なものに結びつける変形の視点で、人間を生命の起源の場所に立たせる。それは、レヴィー・ストロースが探しに出かけたが、博物学者たちがすでにそれ以前に作り出していたものだ。

よく知られるように、17世紀の博物学者らにとって、野性的なものは、文明化されたものの反対ではなかった。野性的なものは、彼らが探していた、自然における生命の実相だった。しかし、そんな溢れんばかりの生命の豊かさは、いったいどこに由来するのだろうか。そ

れは、山々のなかで、エベレスト山頂で、ヒマラヤ山中で、アフリカの砂漠で、アンデス山中で生き残るために発揮される、巧みな技量に由来する。彼らは生命の源を熱狂的に探し求めるあまり、起源があると思われる場所にまで行った。それはとても興味深い。というのもそれ、生命の起源を探しに行くという経験は、子供じみた人間の経験だからだ。他方で実のところ、生命の起源は私たちを通じて語っている。その素晴らしい詩「人間とその旅」のなかでドリユモンは、こう述べる。人間存在は、〈大地Terra〉でのつまらない日常に、気晴らしのなさに退屈し、あるものを狩りに宇宙空間へ旅立とうと決めた。博物学者がしていたのもこれと同じことだ。

彼らは生命を追い求めた。詩人がいうに、人間がすべき大旅行は、自己自身から自己自身へ〔の旅〕だ。とはいえ、これは神秘主義的な意味ではない。つまり、人類がどこかに探索すべき霊的超越の実在がいると仄めかしているわけではない。彼が言っているのは、私たちはすでに生命である、ということだ。どこであれそれを探し求める必要は、私たちにはない。私はこのことを、なんと驚くべきことかと思っている。というのもそれは、私たちに自信を与えてくれるからだ。科学的観察も含めた可能な限りのあらゆる観察よりも、生命が優れていることについての確固たる自信を。

この修正主義〔negacionismo〕の時代、平坦な大地の時代にあつて科学が引き受けている役割をととても好ましいものだと思っている。人間による解釈が捉える以前に、生命がすでに存在していたことを示す証拠を、科学は徐々に示している。何十億年も前から生命はすでにここに根を下ろしていた。私たちが〔生命という〕列車に乗り込んだのは、遠い駅から、すべての始まりから隔てられた駅からだ。私たちはこの列車で移動しているに過ぎない。少々単純化した考えとはいえ、これは、私たちが住んでいるこの世界は、私たちより大きいのだ。

〔ブラジルの原住民族ヤノマミのシャーマン〕コペナワ・ヤノマミが言うように、私たちは、混乱の種を撒き散らし、海岸を汚し、至る所

に石油を放出し、空の屋根に穴を開けている。彼が言うに、ナペ、つまり白人が大地の身体を過剰に温め、フトウカラの胸、つまり空に穴を開けた。だがそれは、雲に覆われたこの空ではない。「マラカトゥ・アトーミコ」の唄にあるように、「[...]この空の背後には別の空がある、別の空が」。

そこに、この別の空に、その胸が火傷で苦しんでいる。こうした観測は、地球サミット1992以前に遡るが、サミット時に科学者たちは、「私たちは空に穴を開けつつある」とついに述べたのだった。シャーマンたちはこの傷が空の中に生じる危険をすでに警告していた。空もまた感じるができるのだと理解するシャーマンのこうした感受性は素晴らしい。なぜなら彼らが言っているのは、生命は至るところにあり、生命は空にまである、ということだからだ。空でさえも生命のないものではない。

おろかにも天上にまで生命を追い求める人々がいる、生命はここに、あちこちに、至る所にあるというのに。生命は至る所にあるという理解へと私たちを連れてゆく省察は驚くべきものだ。というのもこの省察によって私たちは、生命自体と同様、事実を、あらゆる時代を、歴史上の時代を、地質的時代を貫き通してもものを見る力を与えられるからだ。

リオネグロ川上流出身の我らが祖先――ベルタ・リベイロの言うように黒い海の民――トウカノ、デサナ、バニワといった諸民族のまとまりが全体として、私たち人間がいま持っている身体の変容についての物語を生み出したのだが、この身体を私たちは別の形で、別の経験で、たとえば魚や水として知っていた。いかに生命が記憶を担うものであるのか、いかに先祖の記憶を運ぶものであるのかがわかろう。ところで先祖に由来するものは、必ずしも人間の形をしていない。

私が先祖のことを考える時、私は自分に似た人々のことを考えてはいない。想像もできない、野生の存在のことを考えている。

これが「野生」の意味し得るものだ。それは、ギリシャ思想に関して言われる、文化主義的統制の対象となるようなものではない。もちろん、プラトンとその仲間たちは、アテナイを逍遙しながら周囲の世

界を見つめ、世界は野生的〔野蛮selvagem〕だ、と言い得た。そう言うことで、彼らは真理にこと欠いてはいなかった。〔しかし〕彼らもまた野生であった。そしてギリシア人同様私たちも。

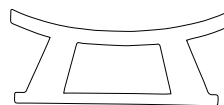
3年前に始めた連続講座をセルヴァジェム〔野生〕と呼ぶことにした時、専門分野横断と文化横断についての議論があった。そこには科学分野によって課された線引きを超えて、よりどころなしに思考しようという欲求があった。よりどころなしに思考しようとは私たちは決めたのだが、それは良い決定だった。セルバジェムの講座にエマニュエレ・コッチャ、アントニオ・ノブレや他の著名な現代思想家らを招くことを挑発的だと捉える人もいた。しかし、結局重要だったのは、こうした挑発が、創造を引き起こし科学の地位を揺るがすことだった。

生命は私たち全てを貫く、生命は野生的だ。ここで私たちは、生命という驚異の尽きぬ源泉への感覚を取り戻している。この感覚を取り戻すことは、ちょうど、色つきのパラシュートが広がり、精神や主観性を拡張するようなものだ。オルダス・ハクスリーは知覚の扉について語っていた。バーチャルの扉へ目を釘付けにして閉じこもっていたパンデミックの時期に、私はこの窓という観念を、閉じ込められた場所、閉じた空間からの脱出の努力として何度も考察した。窓を私たち自身の目とみなすこともできる。私たちが周囲の生命を見ているのは、この〔窓という〕目によってである。触覚のような他の感覚を経験するのはその後で、世界への最初の眼差しは、この眼球という窓からなされるのだ。

クリシュナムルティやインドの他の尊師らは、一粒の砂には全宇宙が宿ると言う。こうした視点により、人間は思考と心をなだめることができ、宇宙へと探検に出かける必要などないということが分かる。空にロケットを放つ必要などない。私たちを魅了するこの宇宙の風景を 私たちは、自分の体の中と、周囲の極小の生命体の中に探し求めることができる。宇宙の風景はすぐそこにある。生命は至る所にあり、宇宙の風景はまさにここ、細胞のレベルで存在している。「それにしても、生命の起源は本当にこの地球上にあったのだろうか」とい

った思弁は、〔人間という〕種に固有の問いかけである。それは人類にしか投げかけることのできない問いの典型だ。他のいかなる生命体も、こうした種類の問いを投げかけることはできない、なぜなら人間以外の生命体は、もっぱら生命を生み出すことしか問題にならないような仕方で、存在の流れの中に留まっているからだ。私はよく人に言う。「いいですか、そのためにこの惑星を離れる必要はないのです。まさにここでそれができるのです。生命に満足するという経験をすることが。」

2018-19年に対面で行った連続講座セルヴァジェムは、私にとって、クムス族のように座り、地に足をつけるのに役立った。彼らはやってきて〔「クムロ」と呼ばれる〕スツールを床に置き、ゆったりと座る。〔クムス族の〕シャーマンの体とスツールは一体となり、〔意識の海を旅する〕一つの本物の船となるのだ。



炎の上を飛び越えながら

私たちは感受性を台無しにした期間を通過しているところだ。抱擁し、互いの腕の中で抱き合うことも、他人と遊ぶことももはやできない。これが、生きていくという気持ちをひどく害している。薄めのお茶を飲んでもそれを埋め合わせられないし、この経験を耐えうるものにしたたり、この経験が人体に根を張らないようにしたりすることなどできない。それはおおよそ、症状のないまま病気に罹るようなものだ。要するにそれは、隔離体験を、症状なき感染にすることだ。症状など必要ない。症状は私たち次第だ。各人は、生命に直面した状態に対応する症状を生み出す。

近年外界と初めて接触した原住部族のゾエ族と共に仕事をしている医師エリク・ジェニングス・シモエシュは、パンデミックが彼らに及ぼしうる危害を非常に危惧していた。彼は感染のピーク時、この部族を隔離することに成功した。ゾエ族は誰一人病気にならなかったと彼は嬉しそうに私に語った。感染を避けるため何をしたかを問われ、ゾエ族の人々は言った。「私たちは森の最も奥深くへと逃げた。人が通った道を離れた。誰ともすれ違わない場所まで行った。忌避を実行したのだ。これは私たちの文化である」

子供が生まれる時に、子の父親は祖父母と会ってはならない。これは彼らの文化体系の一部をなしている。この父親は交流の輪の外に留まり、人目を避けなければならない。もし見られたら、子供は病気になる。忌避には狩人の例もある。狩人が新たに子をもうけると、彼は動物を狩りに、行き当たりばつたり林へ出かけることはできない。彼は非常に用心深くなければならない、なぜなら、動物の精霊が今度は彼を狩るかもしれない、子供と母親の健康に影響を及ぼすかもしれないからだ。こうしたことが忌避の実践と文化である。

ゾエ族は彼ら自身の回復装置を起動し、病気になることを避けた。西洋医学の観点からこれを観察したエリクは、森の中においても忌避の対象として彼らが適用すべきものを知って、ゾエ族の能力に感心したそうだ。その理由をエリクが尋ねたところ、彼らは「この病気

の精霊は空気のなかを移動するからだ」と答えた。彼らはこの病気の精霊を見て、それがどのように空気中を移動するのか見ている。ゾエ族それを彼らの文化により、社会的実践により知っている。ゾエ族は森の民であるゾエ族の友人たちが感染対策として効率的な医学を有していることを見てとり、エリクは非常に驚いた。

ある日私の心に浮かんできた、「伝統」と名付けた詩で、私はこう書いている、「歌い、踊り、火の上を飛び越えながら、私たちは、伝統との連続のなかで祖先の痕跡を辿っている」。この喪失の期間、私たちは火の上を飛び越えている。とても用心し、とても注意深くなければならない、なぜなら火の飛び越え方を教えられている人々も、気を逸らせば足を火傷するからだ。火を飛び越えているつもりもなく飛び越えられるほど深く集中した状態でなければならない。そうした状態は、私たちの文化のうち多くのものに存在している。

今年(2020年)のいくつかの期間、体の圧迫感に苦しんだ人々がいる。体の変化に敏感でない人や注意を払わない人でさえ、身体器官に苦しみを感じた。私たちが今しているのは、まったく通常とは異なる経験だ。生活を取り戻したいとある人が言っているのを私は聞いたことがある。「なんという苦しみだ」と私は思った。この人は生活を取り戻したいのだ。こういう仕方で、今日「ニューノーマル」と呼ばれるものを指し示すこともできよう。「中断」状態から逃れたいと望む全ての人々のなかには、大きな不安がある。私たちの生きるこの時期を語るために、私は「中断」以外の言葉をいまだ見出ししていない。

日常生活を科学的論理で組み立てようとする客観科学の教育を受けた人でも、日常生活の分断を経験すると、病気にまでなってしまうことがある。多くの人々が、コロナのせいでも、感染したからでもなく、生活の中断を余儀なくされたと感じるゆえに病気になり得る。習慣的な行動は単作〔単一作物栽培〕のようなものだ。ほらこの通り、状況がなんであれ、単作はけっしてよいことではない。単作が自己の内側で、隔離されている時も。なぜならそれは、生きていくという他のあらゆる感覚との接続を私たちから奪うからだ。

生活を取り戻したいと望んでいるのは、何十億もの人々だ。しかし、いまこれほどまで回復したいと望む生活を、彼らは一体どうしていたのだろうか。

自己の内面で単作を生きる精神状態を逃れるため、他の存在との連帯的生活を送ろうと努めていた稀な人々は、他の生命から、木、鳥、魚、山の生命から栄養を受け取りつつ、いわゆる魂に近いものとの遭遇を果たした。

単作の経験として定義された生活は、他の諸々の接続関係から隔離した生活のこうした経験である。花も雲も風も、あらゆるものは生きていと理解する必要がある。

多く人は我が家にいると感じられず、この〔自宅という〕繭から出でどこかへ行こうと急ぐ。繭は快適ではない。この事実は、私たちがいったいどんな生活をしてきたのかを、どんな生活を私たちが望んできたのかを考えさせる。生活が形作られる多数のプロセスを理解することが非常に大事だと私は思う。知的経験、読書、文学、あらゆる物語から学びうるものを超えた、生活の経験のなかに私たちを関わらせなければならない。自分自身を元にした経験をするよう、私たちは呼びかけられている。

この未来の観念、時間とは展望〔前方を見ること〕であるというデカルト的な視点について語るためのイメージを、私はたった一つの方向の中に探そうとしていた。この展望は、明日を探るという、地球全体で私たちのすべてが参加している運動と同一のものだと私は見なしている。「明日は売り物ではない」と題した文章で私は、向こう側にあるもの、明日であるところのものを知ろうとする私たちの不安に問いかけた。

科学研究同様、文学においても、宇宙の爆発が生じた瞬間は、いずれにせよ前でも後でもない。この出来事を私は、明日を知ろうとする私たちの不安以前の「神話の時間」と呼んでいる。

生き生きとした不確かさ、これはすでに〔第32回サンパウロ〕ビエンナーレのテーマだったが、パンデミックの予防ワクチンができるか

どうか、人間が火星に宇宙船を送るかどうか、他の惑星を植民地化できるかどうかを知ることの不確実性の不安に先立つ経験である。それも同じ狂乱だ。それも同じ不安だ。私はこの点をしばしば主張してきた。というのも、私たちとともに生きている他の存在は、明日というものに関心をもたないからだ。何の保証もない、生きているという感情に彼等の経験は完全に委ねられている。

それはたぶん、色付きのパラシュートのイメージ、逃げる必要もなく怖れも不安も引き起こさず落下する、という観念に見出すことのできるものだろう。私たちは恐怖の状況を前にして、詩的な経験をしていた。万物にある生命の感覚と接続できるなら、日常を生きることは、労苦に充ちたものであることを止め、何も欠けるところのない何とも素晴らしい経験になると、私は思う。

それは、わずかなもので生活するという観念と関わっている。わずかなもので生活することは、何も持たずに生活するのとは異なる。わずかなもので生活することは、半分満たされたグラスあるいは半分空のグラスと同様だ。「我々はそれをしなければならない、なぜなら彼らは何も持っていないのだから」といった〔募金を呼びかける〕広告をみな一度は見たことがあるはずだ。しかし何も持たないのがあなたである時、経験は違ったものになりうるだろう。

わずかなものによって生活すること、それは5、6月から地球一つ分に相当する量を消費するこの世界に対する真の挑戦になるだろう。今年、パンデミックは時計を8月まで遅らせた。私たちは15年前の水準、地球一つ半を消費していた時代に戻ったのだ。今日私たちは、毎年地球を二つ分消費する水準に戻ってしまった。

毎年地球二つ分の消費についてのこうした注釈を聞き、譬え話に過ぎないと考える人が非常に多い。しかし、アマパーで起きたことを見てほしい。このブラジル北部の州は、ほぼ一ヶ月電気がないままだった。ロライマ州もまた何回か停電した。彼らは今、機械をどう稼働させるかで対立している。

私たちはエネルギーを分別なしに消費している。都市を動かすエネルギーについて私たちは語るが、私たちが動かすエネルギーも存

在する。一年に地球二つ分食べること、それはわずかなものによって生活することについての省察と関わっている。全てを消し去って、私たちを無一文にすれば良いというわけではない。むしろ、わずかなものによって生活することが重要なのだ。

わずかなものによって生活すること、それは今私たちの手にあるもので生活することだ。不安も、明日を追い求めることもなく。不確実性を生きるという経験をすることに対する感受性を具えることだ。

21世紀の初めから私たちが長く患うこの災禍の時代、私たちがあまりに安心しているように見えるが故に、人工知能はすっかり余裕のようだと、私はよく言う。我らの小さな機械はすでに人類に命令し始めた。例えば「あそこの電気を消し、こちらを点けて、あそこに行き、こちらに戻れ」といった命令を。新たなタイプの教育、機械による教育の中に私たちは突入した。

〔流域にクレナッキ族の村がある〕ドセ川の向こう岸、今私がいる場所の向かいにあるタトゥクラク山が、雨雲に包まれて閉じた様子を見せる時、易経の八卦にある「湖畔の山」が思い出される。山頂が霧に包まれ雨雲の掛かる山を眺める時、人は自分にこう言う「おとなしくして、今日は何も新しいことはしておかないようにしよう」。しかし山が、複雑な山肌の模様で飾られた壮麗な山容を露わにすると、こう言う「ああ、なんて素晴らしい日だ！」わずかなものによって生活するとはこう言うことだ。

二つ分の世界を消費するという観念は、実のところ、観念ではなく、現実だ。科学は、人間の生命がもつ生産能力と生存可能性を理解することに成功した。

20世紀まで、人類は拡散して全大陸を占拠し、各人が移動し、住み、食べ、生き、計画を実行するのに十分な分だけ消費していた。天然資源の消費会計が赤字になるまでは。これはしばしば家計で起こることを想起させる例だ。私たちは負債を負い、一年の半ばから、次の年の地球の「資源」を食べ始めている。

これが意味しているのは、私たちが森を使い尽くし、河川を使い尽くしているということだ。産業革命と近代の経験全体が、化石燃料

の上に成立している。鉱石は山々から掘り出され、鉄板に姿を変える。私たちが形を変える全ての原材料は、地球という有機体を消費して作られている。

山は、車、家電製品、鍋、オーブンレンジ、冷蔵庫を製造するため鉄板に形を変えられるが、これらのものは、決して山であることを止めてはいない。それは地球という有機体においては少なくとも山である。使用される金属と他のあらゆる原材料は元に戻らない。リサイクルの観念は、さらなる消費のためリサイクルすることにその本質がある。自然に返すことではないのだ。海は放出されたゴミに加えて、私たちがそこから奪った多くのもののせいで使い尽くされている。海の底にはプラスチックの山で埋められた海溝がいくつもある。つまり、私たちは、地上で自然の山を消失させ、海溝のなかに人工的な山を出現させている。

私たちは地球を荒らし、消費している。新しいエネルギーを消費するのと同時に、私たちは、化石燃料から出た、エネルギーの不活性化残骸を作り出している。一年に地球二つ分を私たちは食べている。気候変動についての専門家集団がいる今、私たちの計算はずっと精密になった。この専門家集団は分析をしてほぼ毎週報告書を作成している。地球温暖化の問題を追っている科学者たちは、地球という生物圏と私たちの環境で生じていることに関して日々流れてくる情報にアクセスできる。いわゆる人新世の時代を、私たちは存分に経験している。そして人新世を特徴付けるのは、地球上に人類が残しうる跡だ。それは非常に重い印、非常に重い痕跡で、地球を食べる者たちの表彰台へと人類を上がらせた出来事の推移を根底から変えない限り、消すことのできないであろう痕跡なのだ。

時折私は、地球〔惑星planeta〕という言葉を使うこともあれば世界という言葉を使うこともある。その時私は常に違った事柄を扱っているのだ。地球とはガイアであり、私たちが今文字通り食べているこの有機体である。世界とは諸々の想像、ビジョン、見方の総体であり、一つの人類というものを確立させる諸観念の生産全体だ。世界

は人類の創造物である。地球ではない。地球が私たちを創造したのであり、しばらくの間は私たちを地球が担い続けるだろう。私たち人間が耐え難きものとなる時に、この素晴らしい地球は、その機能、知性、資源により、私たちをお払い箱にするだろう。数百人の科学者らがワクチンを開発、研究、実用化できるようにする能力ゆえに科学を賞賛しつつ、私たち自身がウイルスと戦っている一方で、ガイアというこの有機体は私たちを消し去る方法を知るための研究をする必要などない。ガイアは知性を持っている。

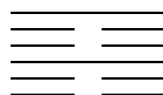
都市という観念を再度問わなければならないだろう。なぜなら都市はあまりに多くの人を、たえず引き寄せ続けているからだ。都市は、多くのエネルギーを消費する。それは消費のスピードを早める要因だ。あなたが旅行し、川を遡り、村へ行く時、あなたはあらゆるものの消費を明らかに減らしている。電気ですえも。なぜなら単純に、村に電気はないからだ。村へゆくことは、あたかもエネルギーポンプから逃れるようなものだ。あたかも、服を、食料を、薬品を、装備品を、このガラクタの山を、生産された全てを、コペナワ・ヤノマミが言うように、「商品」を逃れるようなものだ。商品の世界から逃げなければならない。ところが、結局都市は商品世界を加速させる要因だ。パリ、ロンドン、ニューヨーク、リオデジャネイロ、サンパウロといった大都市で生活するよう人々が促され続けている以上、私たちとしては、建築家や技術者を、セルヴァジェムでのトークに招かなければならない。

私の印象では、私たちの〔オンライン〕トークにアクセスする人々に多いのは、数世代前から都市生活者であるような人々である。そうした人がコンテンツ消費者としてアクセスしている。大義に連帯する人として、それについてより知りたいと望むものの、全く無力だと感じる人として。

都市は、ガイアという有機体上にできた血腫のようなもので、再度問題にされるべきものだ。都市は私たちの惑星のブラックホールだ。ところで、啓蒙思想も、実証主義も、都市を光り輝く素晴らしい場所であると我々に思わせてきた。しかし、それは都市の最近の歴

史にすぎないこと、こうした都市は電気と共に生まれたわけではないことを忘れてはならない。

エルサレム、マチュピチュ、イスタンブールあるいは〔アステカの首都〕テノチティランのような過去の都市国家を思えば、都市は病弱なものではなかった。手をかけ過ぎたがゆえに、都市はそのようなものになったのだ。今日、私は建築家や技術者を批判して、こう尋ねる。「これを目の前にしてあなたはいったいどうしますか。非常に明白な責任があなたにはあります。これらの塔を、高層ビルを、鉄とコンクリートでできた非常に重い構造物を、科学で持続的にするのは、あなたなのです」と。コンクリート、鉄、セメントといった、河川を殺し、墓場の美学を先導するこれらのものとは別のモデルを、私は彼らに考えさせようとしている。都市を破壊すべきだとは言わない。しかし、都市の姿を変えなければ、都市を庭に変え、生きた要素で満たさねばならない。



「帆船」での引用

クラリス・リスペクトール『野性の核心の近くで』Rocco, 1998年〔Clarice Lispector, *Perto do Coração Selvagem*, Rocco, 1998.〕

エマヌエレ・コッチャ『メタモルフォーゼ』Dantes, 2020年〔松葉類・宇佐美達朗訳『メタモルフォーゼの哲学』勁草書房, 2022年〕
〔Emanuele Coccia, *Metamorfoses*, Dantes, 2020〕

カルロス・ドルモンド・デ・アンドラーデ「人間、旅」、『白の不純さ』(Companhia das Letras, 2012年)所収〔O HOMEM, AS VIAGENS, de Carlos Drummond de Andrade. In: *As Impurezas do Branco*. Companhia das Letras, 2012.〕

人、地球のあまりに小さな被造物は
地球上で退屈している
大いなる神秘の場所で、楽しみのほぼない場所で、
ロケット、カプセル、モジュール、
月にゆくための隊列を作っている
慎重に月面に着陸し
月面を歩き
月面に旗を立て
月を体験し
月を植民地化し
月を文明化し
月を人間化する。

人間化された月、まさに地球のよう。
月面で人は退屈する。
火星へ出発しよう--人は機械にこう命令する。
機械は従い、人は火星に着陸する
火星上で歩き
体験し
植民地化し
文明化し
創意工夫と芸術で火星を人間化する。

人間化された火星、なんてつまらない場所。
よそへ行こうか？
もちろん、と機械は答える
洗練され、従順だ。
金星へ行こう。
人は金星に降り立つ、
彼がすでに見たものを見る--これが金星？
同上

同上
同上。
木星に行かないと
人は狂ってしまう
不正義により正義を宣言し
墓穴を再び掘り

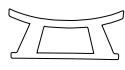
扇動を繰り返しに
何度も扇動しに行かないと。
他の惑星は他の植民地用に残っている。
宇宙全体がそのための惑星の行列となる。
人は太陽に到達するのかそれとも、君に会うためだけに引き返すのか？
太陽の表面で生きるための不燃性宇宙服を
人が発明するのを君は見ない。
人は太陽に降り立ちこう言う
それにしても太陽はなんと退屈なのか、飼い慣らされたスペインの偽の雄
牛のようだ。

太陽系の外にはまだ植民地化すべき惑星系が残る。
それらが全て植民地化されれば
人には最も困難で非常に危険な、自己から自己への旅が残っているのみだ
(装備は十分か)
自分の心の
大地に足を下ろし
実験し
植民地化し
文明化し
人間化し
人は
自身の未踏の
腑の中に
はらわた
共存するという
永遠で疑いえぬ喜びを見つける

オルダス・ハクスレー『知覚の扉、空と地獄』Biblioteca Azul, 2015年〔As Portas da Percepção e Céu e Inferno, de Aldous Huxley. Biblioteca Azul, 2015.〕

ダヴィ・コペナワ、ブルース・アルバート『空の落下:あるシャーマンの言葉』Companhia das Letras, 2015年〔A Queda do Céu: Palavras de um Xamã Yanomami, de Davi Kopenawa e Bruce Albert Companhia das Letras, 2015.〕

「マラカトゥ・アトミコ」歌：ネルソン・ジャコビーナ、ジョルジ・マウチネル、1974年作曲〔Maracatu Atômico, canção de Nelson Jacobina e Jorge Mautner composta em 1974.〕



「クムス」：リオネグロ地方の様々な原住民族における祈祷師
「クムロ」：クムスが祈祷で使う腰掛け

「火の上を飛び越えて」での引用

アイウトン・クレナッキ「伝統」、『今日の原住民詩』(REVISTA POESIA, N.1, 2020年)
〔TRADIÇÕES, DE AILTON KRENAK. IN: POESIA INDÍGENA HOJE. REVISTA POESIA, N.1, 2020.〕

歌いながら、踊りながら
火の上を飛び越えながら
私たちは祖先の残した痕跡を辿る
伝統に
連なるように
*
我が父
父は火
止むことなく燃える
我が父
父は火
止むことなく燃える

燃える、燃える、燃える、燃える
止むことなく
かつてあったものを燃やす
これからあるだろうものを燃やす
燃える、燃える、燃える、燃える
止むことなく燃える

アイウトン・クレナッキ『生活〔生命〕は便利ではない』Companhia das Letras, 2020年〔A vida não é útil, de Ailton Krenak. Companhia das Letras, 2020.〕

「生ける不確実性」2016年第32回サンパウロビエンナーレのタイトル、Jochen Volz, Gabi Ngcobo, Júlia Rebouças, Lars Bang Larsenによる企画〔Incerteza Viva, título da 32ª Bienal de São Paulo, em 2016, com curadoria de Jochen Volz, Gabi Ngcobo, Júlia Rebouças e Lars Bang Larsen.〕

『易経 変化の書』周王朝(紀元前1150-250年)以前の時代に由来する、神託により伝えられた中国の智慧の古典

☰☷ 艮(ゴン)／静寂(山)

「生命は野生的である」に収録された二つのテキストは、2020年11月19日と12月3日にアイウトン・クレナッキとアンナ・ダンテスとのあいだで行われたオンライン上の会話を編集したものです。

SELVAGEM手帳の編集作業は、セルヴァジェムコミュニティーが合同で行いました。編集コーディネーターはMariana Rotili、制作はIsabelle Passosが担当しました。Victoria Mouawadにはテキストの転記と共同編集を、Antoine de Menaと馬場智一にはこの手帖の翻訳と見直しを感謝します。詳しくはselvagemciclo.com.brをご覧ください。

凡例：

「 」=本文中引用符“ ”で括られた語

< >=本文中強調のため大文字で書かれた語

(), []=本文中の補足

[]=訳者による補足

下線 =原文イタリック

セルヴァジェムの全活動と資料は無料で公開されています。この活動への支援をご希望の方は、原住民の文化と知の継承のための、四つの教養センターのネットワークである、Escolas Vivas への資金援助にご協力下さい。詳しくはselvagemciclo.com.br/colaboreをご覧ください。

馬場智一

長野県立大学グローバルマネジメント学部教授。専門は哲学、倫理学、思想史、哲学プラクティス、レヴィナス、ハイデガーを中心にした20世紀独仏哲学およびユダヤ哲学。また、学校や職員研修などでの哲学対話や街中での哲学カフェを様々な場所で実践。2018

年より、文化・分野横断的国際研究会Philosophy as Global Conversationを世界各地で主催。詳しくは<http://philogc.org/>。主な著作に『倫理の他者』（勁草書房、2012）、『尊厳と生存』（共著、法政大学出版社、2022）ほか。訳書にバルバラ・カッサン『ノスタルジー 我が家にいるとはどういうことか』（花伝社、2020）、論文に「哲学対話における「問い」の難しさについて」（『思考と対話』4号、2022年）、「Philosophy as Journey”, *Global Conversations*, vol.2, 2019他。

アントワーヌ・デ・メナ

アーティスト、映画作家、フランス語・スペイン語翻訳家。リオデジャネイロ在住。アートシネマ、ドキュメンタリーエッセイ、ビデオ、詩、デッサン、絵画、カリグラフィー、インスタレーションなど多様な作品を制作。Eiras-Paracambi研究会の芸術ディレクター、イベントスペースxow.rumi (Glória, リオデジャネイロ) コーディネーター。

<https://linktr.ee/antoinedemena>

謝辞

Instituto Clima e Sociedade
Conservação Internacional Brasil
に感謝致します。

SELVAGEM 手帖
Dantes Editoraによる
デジタル編集
Biosfera, 2023年

